

さまざまな ハラスメント

介護ハラスメント

介護現場では、職員によるサービス利用者へのハラスメントが話題になる一方、近年利用者やその家族からのハラスメントを訴える介護職員が増えています。利用者やその家族からの過度な要求により、精神疾患や離職の要因になっています。

不必要に体に触れてくる、性的暴言を吐くなどの例も多く、日本介護クラフトユニオンが、平成 30 年 6 月に公表した調査では、何らかのハラスメントを受けた経験がある介護職員は、74.2%に上っています。

背景には、介護職員の尊厳が低く見られていることや、事業所が利用者を利用を断ると経営に響く恐れもあることから、上司に相談しても「我慢してよ」と言われることがあります。

どうすればハラスメントから介護職員を守るのでしょうか。対策の一つとして「同性介護」があります。排泄介護、入浴介護といった作業は、利用者のプライバシー保護の観点からも同性介護が望ましいとされます。しかし、介護職員は女性が多く、対応は困難です。職員の声が上げやすい環境づくりなど、介護職員の尊厳を重視し、環境の向上につながる対策が望まれます。



本の紹介

※下記の本はアイレックで借りることができます。

あっ！ そうなんだ！ 性と生
幼児・小学生そしておとなへ

浅井春夫 他 編著
／エイデル研究所



一人ひとりを大切にするという視点から、「からだ」「いのち」「自分と他者との関わり」について描かれた絵本。子どもへ伝える際のポイントも丁寧に解説されており、家族で語り合うきっかけになる一冊です。

セクシュアリティをことばにする 上野千鶴子対談集

上野千鶴子 著／
青土社



2015 年 4 月 24 日に発行された本で、上野千鶴子さんが対談相手とセクシュアリティについて語り合っています。第 7 章の牟田和恵さんとの対談では、セクハラやハラスメントについて取り上げています。

彼女は頭が悪いから

姫野カオルコ 著／
文藝春秋



東大生 5 人による女子大生への強制わいせつ事件をモチーフにした小説。自分が被害者にも、セカンドハラスメントの加害者にもなり得るかもしれないと考えさせられます。

私たちにはことばが必要だ
フェミニストは黙らない

イ・ミンギョン 著／
すみみ・小山内園子
訳／タバックス



2016 年ソウルの江南駅で起きた女性刺殺事件を機に、性差別に対するこれまででないほどの関心の高まりを見せる韓国。自分を尊重する意思のない相手との対話には断る選択もあると新たな視点をもたらし、女性問題に強い気持ちで立ち向かう勇気を与えてくれます。

セクハラ・性暴力に女性たちが声を上げてきた結果、今まで「仕方がない」「なかったこと」にされてきた状況やその関係の問題が次第に明らかになってきました。

その中で、介護職員に対する利用者やその家族からのハラスメントや、障がいをもつ女性たちへのセクハラについての実態が少しずつ明らかになってきています。

被害を防止する第一歩は「気づく」ことです。今まで届きにくかった身近な声にも耳を傾けていきたいものです。

障がい者ハラスメント

障がい者に対するハラスメントには、一般に心ない対応をとる人ばかりでなく、厚生労働省（平成 29 年度都道府県・市区町村における障害者虐待事例への対応状況等）の調査では、いつも支えているはずの養護者による虐待の実態も報告されています。

養護者による虐待の中で最も多いのは身体的虐待で、心理的、経済的と続きます。どの種類も女性の方が被害を受けやすく、性的虐待については、被害者のほとんどが女性で、深刻な影響が懸念されます。

性暴力の背景には、障がいの特性として、不審者に対してどう対応するのか分からないこともあります。また、子どもの頃からいじめや孤立の経験を持つ人が多く、人間関係の悪化を恐れて嫌な相手や行為を断れない傾向もあります。前述の調査では虐待者と同居しているケースが 80%を超えており、「暴力・性暴力のリスク」が高いことが伺えます。

海外では、刑法に「性犯罪被害者としての障がい児・者」の概念が盛り込まれているものもあります。日本も刑法の性犯罪処罰規定で、障がい者への暴力に、より厳しい対応が必要ではないでしょうか。

誰も突然、障がいを持つ可能性もあります。誰もが安心できる社会のために、障がい者ハラスメントを身近に自分のこととして考えていきたいものです。

（高橋た）